

水稻の作柄に関する委員会（令和元年度第1回）議事概要

1 開催日時：令和元年8月6日（火） 14:00～16:30

2 開催場所：農林水産省 第1特別会議室

3 出席者：【委員】

雨宮宏司座長、荒井裕見子委員、黒田栄喜委員、竹川元章委員、
平澤正委員、山岸順子委員

【ヒアリング対象者】

◎生産者

野田 秀樹 (滋賀県)

田中 勇樹 田中農園株式会社 代表取締役 (福井県)

遠藤 幸男 株式会社遠藤農産 代表取締役 (福岡県)

◎県担当者

中橋 富久 滋賀県農業技術振興センター農業革新支援部主幹

小谷 佳史 福井県農林水産部福井米戦略課福井米振興グループ主任

小松 滝人 福岡県農林水産部経営技術支援課専門技術指導員（農業
革新支援員）

【事務局】

大臣官房統計部長、生産流通消費統計課長 ほか

4 議事概要

◎生産者及び県担当者から本年の水稻の生育・作柄、栽培管理状況等の説明を受けた後、委員との質疑応答・意見交換を行った。主な内容は、次のとおり。

（1）本年の気象と生育・作柄の状況について

○ 滋賀県では、4月末ごろに田植えが行われたほ場において、4月末の天候不順により初期生育の遅れがあったが、5月以降、天候が順調に推移したため、概ね生育は順調である。生育ステージは6月中旬の気温が低かったものの、その後の天候が順調に推移したため平年並みである。今後も高温が続いた場合、白未熟粒等の発生が懸念されるため、水管理を徹底していきたい。

○ 福井県では、4月下旬の低温時に田植えや直播を行ったほ場では、活着や苗立ちが遅れた。初期生育は5月の高温、少雨、多照により藻やワキが多発し、分けつ増加は遅れたものの、その後、天候が順調に推移したため、平年並みである。生育ステージは平年並み又は平年よりやや早い状況である。

○ 福岡県では、昨年より降雨が少なく、また梅雨入りが6月24日と例年に比べて遅かったため、用水不足の地域が見られた。早期水稻は用水不足や5～6月の最低気温が平年より低く推移したため、茎数が全体的にやや少ない状況であった。普通期水稻は6月中旬以降、日照不足、気温が低かったため、茎数が少ない状況となっていたが、その後、多照、高温で推移したため、生育は前年並みとなっている。

- 品種によって、一部、茎数等の初期生育に差がみられるものの、概ね生育は平年並みである。
- 7月の日照不足、低温がもみ数、登熟にあたえる影響が懸念される。
- 今後の気温は全国的に平年並みか高い日が多いと予想されるため、高温障害が懸念される。

(2) 稲作技術の展開方向が作柄・収量に及ぼす影響について

【密苗・直まき】

- 直まきについては、作業分散等による労力的なメリットはあるものの、スクミリンゴガイ(ジャンボタニシ)の被害が多い地域では収量が大きく減少、地域によっては慣行栽培に比べて収量が低い、乾田直播では雑草が繁茂しやすくなるなど、課題も多い。
- 密苗は、苗箱数を減らすことができるため、育苗ハウスを少なくでき、面積当たりの箱数も減らすことができるため、労力的・コスト的にメリットがある。

【緩効性肥料(一発型肥料)】

- 高温により肥料効果の発現時期にズレが生じる懸念があるが、その場合は生育ステージも早くなるため、全く肥料が足りなくなると言うことはないのではないか。
- 労力的なメリットがあるため、緩効性肥料の利用は増えていると感じるが、収量に影響する場合があるので、稲の状態を見て追肥することは必要ではないか。
- 緩効性肥料のコーティング(カーボンブラック)が残ってしまい、ほ場外にも流出するため、環境面に配慮した利用方法や素材についても考えるべきではないか。

【新品種の導入】

- 高温障害には高温耐性品種が有効であるが、消費者のニーズを把握した上で作付品種を決定していく必要がある。

【スマート農業】

- ドローンによる生育診断や無人トラクター・田植機の利用、遠隔操作での水管理など、労力的なメリットは大きいため、スマート農業を進めることも必要ではないか。
- スマート農業を導入した場合でも完全に人手が不要になることはないため、学生インターンの受入や地域との交流など、一般の人に農業に対して関心を持ってもらうための取組も必要ではないか。

【規模拡大】

- 規模拡大は、地域的に集約ができないと管理作業などが増大し、作業的・コスト的なメリットが生み出せないため、その点について考慮した上で規模拡大を図っていく必要がある。

(3) 需要に応じた主食用米の生産の着実な実施に向けて、水田経営をどのように考えていくのかについて

- 水稲と水稲以外の作物の作付比率に関しては、労力分散も考慮し、現在の配分で行っていく方向。目指す方向性としては、一定以上の食味を有する米を、いかにコストを抑えて作っていくかである。
- 需要に応じた生産という意味では、業務用米としては、収量の高い品種でいかに収量を向上させるか、また、良食味品種としては、減農薬・減化学肥料栽培を行うなど、それぞれの需要に応じて生産している。